

うすらい

ことばとことばにならないもののあいだに

つづり017

awai より

目次

- 321. 不思議なホテルの夢
- 322. 飛行機雲を見上げて
- 323. あたらしい世界へ
- 324. やることが頭をめぐる朝
- 325. スイスへの旅立ちに向けて
- 326. 日記の編集をしたものの
- 327. 暗闇の中の出発
- 328. セキュリティチェックもゆつたりと
- 329. 搭乗前のエネルギー切れ
- 330. 連なる山に囲まれた街で
- 331. ジュネーブで出会った音楽と、身体に刻まれた旋律
- 332. 声と身体
- 333. 今日という旅の行き先
- 334. 人と人のあいだをつなぐもの –世界を変えた場所を訪れて–
- 335. 夕焼けの見える街で考える時計を作る人々のこと
- 336. 遅延した電車のもたらした出会い
- 337. 街と名前を辿って
- 338. チューリッヒの朝
- 339. そこにいる人に出会わない街
- 340. チューリッヒで見た奇妙な夢たち

321. 不思議なホテルの夢

目が覚めたときに時刻を確認すると4:09だった。昨日の目覚めよりもさらに1時間早い。睡眠はもう十分に取れたということだろうか。起きようかという意識が微かに浮かぶが、また、目と意識を閉じる。

そのあとはずっと夢を見ていたように思う。福岡の中心部にある中高の母校のかつての敷地（卒業後に移転したため、現在は大学の敷地になっている）内の校舎の中で、夢の前半を過ごした。その後、建物から出てその日の滞在先に向かおうとスマートフォンでホテルの名前と場所を確認しようとしていると二人の男性が近づいてくる。どうやら私のウェブサイトを見てくれているようで、二人のうち一人の小柄な男性が「あなたの好みに身長などはないのか」ということを聞いてくるので、私は「簡単に測ることができるようなことは私の中では重要な基準ではない」「その人の持っているセンスのようなものを好きになる」と答える。話しをしながら駅の近くの賑わいのあるエリアまで歩く。

その途中で妹に会い、少し言葉を交わす間に「なぜ私は今回実家に滞在しないことにしたのだろう」と思い始める。実家はその場所からは電車とバスを乗り継いでいくことになるが、繁華街の中にあるホテルよりもよっぽど落ち着いて過ごせるはずだ。そんなことを考えながら、うろ覚えのホテルの名前を目当てに周囲を見回しながら歩く。先ほどの男性はなんとなくついてくる。その男性が自分の書いているものに興味を持ったということは、文章を書くことに興味を持っていたあり、何かしらその人の独自の世界や考え方がありそうだ。そのことについて話しをしてみたいと思い、このあと一緒に食事をするかと聞いた。男性の明確な回答を待たずして、滞在予定のホテルが見えた。

学校の敷地から離れるように歩いていたが、結局、敷地のすぐ目の前にあった。建物の上部にホテルの名前が書かれているが、見た目はホテルっぽくはない。少なくとも落ち着きがある感じではない。「ホテル選びに失敗したかなあ」と思いながら中に入る。予約した部屋の番号は611だったはずだと思い、6階に向かおうとするも、建物には1階から7階に伸びる長いエスカレーターがあり、まずはそれに乗る必要があることが分かる。

7階まで昇ると、降りてすぐのところに予備校の教室のようなものがあり、教室の中に知り

合いがたくさんいる様子が見えたが、ここで知り合いに声をかけられたくないと思い早足でその教室の前を通り過ぎる。そこから階段を使って6階に降り、いつからか手に持っていた部屋の鍵を取り出そうとすると、金属の小さな鍵が、割れて、ボロボロというかボソボソという感じになってしまっていた。鍵と言っても温泉の靴箱の鍵のようなものだ。そのままでは使えないので6階の入り口にあるカウンターで、新しい鍵をもらう。

鍵を手に、フロアの中を進むと、そこは、想像していた1室1室が別々になっている宿泊施設ではなく、6人くらいが一つの空間に寝るドミトリーのような場所だった。いくつかの部屋を周り、自分のベッドがある場所を見つける。ベッドがある空間は、何らかのデザインがなされているように見えるが、「これは結局、二段ベッドが置かれているのと同じではないか」とガッカリした。プライベートなスペースはベッドの上しかなく、ベッドの脇にその部屋に宿泊する人のリュックサックなどが置かれている。

自分はここにどのくらい滞在する予定なのだろうと手帳を開き予定を確認すると、翌日には福岡を発ち、東京に向かいそこからさらに、静岡あたりに向かうことになっていることが分かる。「一晩なら仕方がないか」と思い、部屋の外に出る。ついてきていた男性とその後食事を取ったかは覚えていない。気づいたらいなくなっていたようにも思う。いや、一緒にどこか別の場所で話しをしたのだったか...

部屋に戻って寝る前にトイレに行っておこうとホールのような場所に出ると、どこからか、宿泊施設のスタッフの乗った乗り物が現れた。馬の姿がはっきり見えたわけではないが、それが馬車だと分かる。馬車の後部に取り付けられた座席の中から、金色の髪の毛の少女が出てくる。そのシーンを見て「迷子の子どもを親御さんのところに連れてきたんだな」と思う。そんな光景を横目に進み、女子トイレに入ると、本来なら個室が4つ並べられそうな空間に、おむつ交換のシートなどを備えた、広い多目的トイレが2つ並んでいた。トイレの中には便器が2つある。個室の1つに入り、どちらの便器を使おうかなどと考え、用を足し、また、部屋への道に戻る。その道すがら、見知らぬ人たちのいる落ち着いた空間で寝ることに前向きにならない気持ちを抱えながら歩いていたところで目が覚めた。2019.8.30 Fri

7:49 Den Haag

322. 飛行機雲を見上げて

先ほど、今朝見た夢の話を書き終えたところで、グルグルとお腹がなった。脳と同じように、内臓も動き始めたようだ。小麦若葉のパウダーとヘンプパウダー、アマニ油に水を加え、混ぜたものを、ひとくちひとくち飲む。以前なら、ここでごくごくグラス一杯のドリンクを飲み干していたところだ。そういえばゆっくり飲むようになって、集中力やエネルギーの揺らぎは以前に比べて穏やかになったように思う。ドリンクを飲みながら、今動いてくれている身体、今日も一日動いてくれる身体に、感謝を伝える。

見上げると、南の空には無数の飛行機雲がかかっている。北西の空から南東の空に向けて引かれたものが多い。北欧方向、もしくはロシア上空をやってきた飛行機がスキポールもしくは南欧方向に向かっている線だろうか。上空の湿度や気温によって、飛行機雲ができるのだろう。雲が引かれなければ気づくこともないが、毎日こんなにもたくさんの飛行機が空を行き交っていることに驚く。そういえば以前、リアルタイムで世界の上空にある飛行機の場所を確認できるフライトレーダーを見るのが好きだと言っていた人がいた。日本の空港は使用時間に制限があることが多いことから、夜明けごろには、日本中の空港から一斉に飛行機が飛び立っていく様子が見られ、面白いのだと言う。日本の上空を飛ぶ飛行機は1日に約2,700機。世界の上空を想像すると、そこに1つの街というか、交通網のようなものが出来上がる。日々、何十万人という人が上空を行き来しており、そこに一人一人の旅路があると思うと、空港で、誰かが誰かを出迎える様子がさらに味わい深くなる。

飛行機のことを考えたのは、見上げた空に飛行機雲がかかっていたからか、それとも明後日の朝に久しぶりに飛行機に乗るためか。明後日の朝にはジュネーブに向かう。一週間、いつも通り、セッションや打ち合わせに参加し、途中、中距離の移動もある。ずっとのんびり過ごすわけではないが、いつもとは違う環境で、また浮かんでくることがあるだろう。オランダでは身近にない、大自然を感じられることを期待している。

今日はインテグラル理論のゼミナールの最終回だ。この間の学びや変化を予め振り返り、リアルタイムに起こる化学変化や気づきを楽しみたい。2019.8.30 Fri 8:13 Den Haag

323. あたらしい世界へ

顔を上げると、勿忘草色（わすれなぐさいろ）の空がそこにあった。この色の空は以前も見たことがある。あの日見た空も今日と同じ色だったのだろうか。日が暮れ、8月というときも暮れようとしている。新月でもある今日は、何か区切り目となるような日だったように思う。約2ヶ月に渡って参加してきたインテグラル理論のゼミナールが最終回を迎えたこととも関わりが大きい。最終回は迎えたが、私の中では、終了というより始まりという感じがしている。

ゼミナールに参加した当初、私は、「書籍に書いてあることに対する理解を深めたい。それを今従事している領域に活用したい」という期待や希望があった。それに対して今、何かを理解したという達成感のようなものよりも、広大かつ深遠な世界に足を踏み入れてしまったという感じがしている。新しい世界の扉を開けたという感じもあるだろうか。扉を開けて、数歩を踏み出し、その世界の広大さにおののき、振り返ると、自分が入ってきた扉が既に消えていたという感じだ。冒険映画によくあるように、小さな村から異世界に冒険に出てきたような。心強いのは、そこに仲間がいることだ。少し先に行く仲間、同じように新たにここに足を踏み入れた仲間。物理的に一緒に旅をするわけではないが、この広い世界のどこかに同じように旅をしている仲間がいると思うことに勇気をもらう。

数日前に湧いてきたことが、今またふと降りてきた。私は「繋ぐ」存在であるということだ。世の中には、新しい世界を創るその先頭に立つ人、いわゆる0から1を創り出すと、現れたものをしっかりと形にしていく人・積み上げていく人、そしてその間の架け橋になるような、繋ぐ人がいるように思う。私は、全く違う言葉を話す人たちの言葉を伝える、もしくは天からの言葉を伝えるような、あるときはイタコと呼ばれ、あるときは翻訳者と呼ばれるような存在なのだと思う。今は、「わたし」という存在がどこにあるのか分からないことがある。物理的な身体としての自分を越えた力で、何かを観聴きしていることがあると感じることがある。自分自身が何かの力があるというよりも、何かの受信体のようなものに思える。だから先日見つけた、自分自身を表現する「宇宙望遠鏡」という言葉もしっかりきたのだろう。

今ふと、国のトップ同士が何か歴史的な平和的合意を結べたとき、そこには優れた翻訳者が

いたのではないかという気がしてきた。異なる言語を話すということは、そこに、異なる文化があり、異なる歴史があり、異なる価値観・人間観・世界観があるということだ。そこに橋をかけるというのは、単に言葉の意味を伝えるという作業を超えたものが必要になるだろう。人が主張することというのは、その人にとっての正しさがそこにある。それぞれがその正しさの上にいるうちにおいては、他者の持つ正しさの基準に視点をずらすことはできないだろう。心の中、頭の中に何かを受け入れる余白をつくり、その中に、それまで持っていた世界観とそれに対抗する価値観を包含する視点を投げ込む。組織や国家のトップとして、自組織・自国家の領分を守りつつ、平和と呼ばれるものを築いていくためには、トップ自身がそのようなことをできるとともに、それを支えるような人がいた（いる）のではないかと思う。そんな存在が、自分が目指す姿なのかもしれない。

もう少し、今日のこと、この2ヶ月のことを振り返りたい気持ちもあるが、今日は、脳をだらりと休ませたいという気持ちもある。

ゼミナールを終えベランダに出ると、昨日は5つの花が開いていた庭の睡蓮が、今度は、8つの花を開かせていた。見えないだけで、今日も月はそこに輝いている。新しい扉が開いていることを世界が教えてくれている。2019.8.30 Fri 21:11 Den Haag

324. やることが頭をめぐる朝

今日もいくつもの白い線が空に描かれている。動的な絵画。そんな言葉が思い浮かんだ。明日の今頃、私もちょうどあの線の1つになっているだろう。中庭のガーデンハウスの上には、脚の先と胸元が白い黒猫が丸まって、キョロキョロと周囲を見回している。薄黄色のお月さまのような目がこちらを向いた。カモメの声が聞こえてくる。

ゆっくりと、感覚に心に向け、感覚を漂わせていたいが、今日やるべきことが、頭の中にふわふわ浮かんでいる。一旦それを書き出し、取り組み、そして、改めて日記に向き合いたい。今日進めたいのはまずは明日の出発に向けた支度だ。明日から一週間、スイスに滞在する。いつものように静かに暮らすように過ごすので特別なものはいらないが、滞在期間中の天気と気温の予報を確認し、洋服を選びたい。あとは、普段携っているオーガニックパウダーやお茶などを小分け用の小さなパックに詰める。オイルも持って行きたいが、前回イギ

リスに行った帰りにオイルを入れた容器の蓋が空いて、容器を入れていたビニールの袋が油まみれになってしまったので、今回はどうやって持っていくかの検討が必要だ。持っていくとしたら容器をラップで包むなどの工夫が必要だろう。確認すべきは、明日の朝の交通手段だ。明日は6:55の飛行機に乗る。先日調べたところ、スキポール空港着の早朝の電車は1時間に1本しかなく、6時着の1つ前は5時着となる。スイスはEUではないし、シェンゲンエリアではなくパスポートコントロールを通る必要があるのではと思っていたが、今見て見ると、シェンゲンエリアに含まれている。ということは、6時に空港についても搭乗開始時刻に間に合うだろうか。しかし、早朝便に乗ろうとする人々でセキュリティチェックが混み合っている可能性がある。オランダの電車は遅延やキャンセルが発生することもあるため出発時刻まで1時間を切ったの到着予定というのはやはり危険だろう。だが、5時着の電車に乗ろうとすると、家からハーグの大きな駅までの交通機関も少なく、3時半頃には家を出なければならなくなる。改めて、交通機関と手段を確認しておきたい。支度以外にも、今日は、日記の編集などいくつか取り組みたいことがある。やることに取り組んでいたら一日が終わるかもしれない。そうだ、まず、洗濯をしたいのだった。掃除もしておきたい。全体を見回しつつ、目の前のこと1つ1つに向き合っていきたい。2019.8.31 Sat 8:10 Den Haag

325. スイスへの旅立ちに向けて

旅の支度と掃除、洗濯、昨日の日記の編集とウェブサイトへのアップを終えた。ルーティンにしていることややるべきことを終わると、心の足が地に着いた。家の中に掃除機をかけている途中、旅の支度は、客人を迎えるときの支度と似ていると思った。荷物を片付け、家の中を整える。旅から戻ってくる自分という客人を迎え入れるための支度なのかもしれない。確かにいつも、旅から帰ってくると整然とした部屋は何だかとても心地がいい。ほっとする感じももちろんあるが、「ここで新しい生活を始めるぞ」という気持ちになる。いつの頃からか、私は、「旅から帰ってくる自分が、もう旅に出た時の自分ではない」と気づいていたのかもしれない。

そう思うと、眠りにつくときも、できるだけ家の中を整えて置きたいという気がしてくる。夕方以降に使ったものやグラス・お湯のみなどはついつい出しっぱなしにしてしまうことも多いが、朝目覚めたときにその日の新しい自分があるとすると、目を開けたときに見える世

界、感じる空気はすつと通りが良いほうがいい。オフィスや店舗など、物理的に自分が離れる場所は一日の最後に片付けをしてそこを離れることが日課になってきたように思うが、家というのはなかなかそうはいかない。しかし、心がけというのは大切だし、日記を書くことのように、続けていけば日課になり、やらないと気持ちが悪いくらいになってくる。日々の積み重ねが人生になる。たくさんの方に気を配り、それらを整えようとするとも時間も手間もかかってしまうので、手にするものはできるだけ少なく、清々しい生活を送っていきたい。

旅の支度と掃除を終えた後には、明日の朝のスキポール空港までの交通手段を確認した。搭乗時刻は6:25。とすると6:00に空港に到着する電車に乗るとかなりギリギリになってしまう。その前の電車は5:00に到着する。これだと家を出るのが1時間早まり、3:10頃には家を出なければならない。オランダの航空会社であるKLMだと、搭乗ゲートが比較的建物の入り口に近いところにあり、セキュリティチェックのレーンも多いので、人が少なければ25分あれば駅から搭乗ゲートまでたどり着けるかもしれない。念の為、明日の7:00台に離陸する飛行機を確認すると、両手では数え切れないほどの予定が出てきた。この様子だと、6:00すぎにセキュリティチェックは混み合うだろう。人が並ぶ列で時間を気にしてやきもきするよりは、早く起きる方が安心だ。そうすると、4:21にハーグの大きな駅を出発することになるが、今度はその時刻に駅に到着するのにちょうどいい自宅周辺からのバスやトラムがない。ハーグにはタクシーもほとんど走っておらず、調べても配車予約ができそうにないことが分かる。こうなったら自転車の荷台にスーツケースを乗せていくかと、試してみるも、残念ながらそれも難しかった。駅に向かうバスが深夜に停まる停留所までは歩いて約20分。バスに乗るのは1駅で約3分間。そして、電車が来るまでの待ち時間が約40分。歩いて駅まで行くと約50分...。何とも悩ましい。しかし、昼間の散歩ならともかく、深夜にスーツケースを転がしての50分は辛いだろう。そんなことを考え、結局、3:10頃に家を出て、駅までバスに乗り、そこからスキポール空港に5:00に到着する電車に乗ることにした。となると、朝起きるのは2:30。シャワーは寝る前に浴びて、持ち物は全てスーツケースに詰めておいた状態で寝るのがいいだろう。遅くとも21時にはベッドに入り、早く眠りにつきたい。

そのためには今日、ある程度脳と身体を使う活動しておくのが望ましいだろう。日記の編

集や、いくつかの書き物、考え事などをする予定なのでちょうどいい。飛行機に乗るのは、7月のはじめにロンドンに行って以来、ちょうど2ヶ月ぶりになる。ジュネーブ空港は、確か去年の8月にフランス人の友人の実家に遊びに行ったときに訪れて以来だ。ドイツに住んでいたときに、スイスとの国境近くの街に行ったことはあったが、スイスにしっかりと滞在するのはこれが初めてになる。そういえば、スイスの国境近く、そしてフランスに行ったときに見たアルプスの山々は印象的だった。この1年、山のないオランダの景色を見慣れているので、そのインパクトはさらに大きいかもしれない。日本にいたときには見たことがなかったようなスケールの連なる山脈。滞在先からどのような景色が見えるのか。想像する山々のように、楽しい気持ちも大きくなってきた。2019.8.31 Sat 10:52 Den Haag

326. 日記の編集をしたものの

ベランダへの開け放った窓の向こう、中庭の空間に、先ほどから音楽が響いている。中央アジア系の音楽かと思っていたが、今は、耳慣れた少し古いポップスのような歌だ。今日のハーグは天気がいい。体感気温は30度近くまで上がりそうだ。一度くらいは外に出ようかと迷っている。

先ほど、過去の日記の編集を終えてPDFに変換しようとしたところで、これまで既に編集を終え、ウェブサイトアップしている220から241の部分の次の分ではなく、さらに20番号が進んだところからの分の編集を行っていたことに気づいた。本来、241から260までのものを次にアップしたかったのだが、なぜだかそれより先に261から280までのものの編集を進めていたのだ。編集は今日1日で行ったのではなく、数日に分けてこれまで行ってきたが、スタートするときには何か勘違いをしてしまったようだ。PDFに変換したものをウェブサイトにアップしたところで「完了！」という実感が湧くのだが、それができずになんとも中途半場というか、もどかしいような気持ちでいる。既に編集が終わったところを先にアップするという手もあるが、それはそれで気持ちが悪い。今日は一旦、進めていきたい他の作業に入り、時間があれば今日、なければ明日空港での待ち時間で飛ばした部分の編集を進めることにする。

今日は、家にあるなまものを食べきっておきたい。今残っているのはバナナが一本に小さな

じゃがいもが2つ、レタスのような葉物が少し、小さなビーツが1つに豆腐が半パックだ。今しがた焼いたバナナを食べ、おなかは落ち着いているので、今日の残りの食事は今あるものを食べるくらいでちょうどいいだろう。いつも食べているスーパーフードや飲み物に入れているパウダーを明日からの旅に持っていくために小さなパックに詰めていったところ、瓶に入っているカカオニブがちょうどなくなった。今日のうちに買っておけば帰ってきた後すぐに使うことができるが、カカオニブはいつもバナナと一緒に摂っているので、帰ってきて買い物に行くときに買っても遅くはない。

そうすると今日はわざわざ外に出る必要はないが、この良いお天気の中、少しでも外に出て、上機嫌な人たちの笑顔を見たいという気もしている。今日のうちにゴミを捨てておけば明日の朝ゴミを持って出なくてよくなるので、一本残っているバナナを食べたら、生ゴミとそれ以外のゴミをまとめて捨てに行くついでに散歩でもしようか。やりたいことはたくさんある。これから取り組みたい2つのことに集中して取り組み、15時すぎには外に出られたらと思う。2019.8.31 Sat 12:29 Den Haag

327. 暗闇の中の出発

ハーグにある大きな駅のうちの1つ、他駅からの通過車両が通るDen Haag HSに到着すると、電光掲示板には4:21に来る電車とその次に来る4時台の電車の案内がポツンと表示されていた。入り口付近の窓口には人がいることもあり、周囲はまだ暗いが怖いという感じはしない。ホームに上がり、透明のガラスで囲まれた待合ゾーンに腰をおろし、パソコンを開いた。

家を出るまで、いや、駅に向かうバスの停まるバス停の付近に来るまでは順調だった。いつものように白湯を沸かし、オイルプリングをしながら太陽礼拝のホーズを繰り返し、湧いた湯を冷まししながら身支度をし、白湯を飲み、二杯目の白湯にはクコの実を入れて飲む。2:20にかけた目覚ましの9分後に鳴ったスヌーズの音で起き出したことと昨晚のうちにシャワーを浴びていたことを除けば、いつもと変わらない朝。荷物は、電子機器とその充電ケーブル以外は昨日のうちにスーツケースに詰めてある。流しの横で乾かしていた食器やカトラリーを拭き上げて片付け、スプリングコートのような薄手のコートを羽織り、ストールを巻く。

スーツケースを持って急な階段を降り、玄関の扉を開けると、そこには久しぶりに見る夜があった。しかし、その闇は軽い。この国が、女性が夜中にスーツケースを引いて歩くことができる安全な国であることに感謝しつつ、あまり気を抜いてもいけないと思いながら歩く。住宅街はいつもの住宅街だ。どこかに若者がたむろしているということもない。運河に近づくと、黒猫が一匹、大通りをトコトコと横切った。いつも中庭で遊んでいる姿を見かけるような、少し細身の猫だ。中庭や、家の中、車通りの少ない道に猫がいることはこれまで見たことがあったが、大通りを横切る猫を見たのは初めてだ。暗いこと以外はいつもと変わらないように見える街中も、やはりいつもと違う世界が広がっているのかもしれない。

一昨年、ドイツに来たとき、そして昨年オランダに来たとき、どちらも大きなリュックを背負い、大きなスーツケースを引いてやってきた。そこにはこれから始まる新しい生活を楽しむ気持ちもあったが、それ以上に、不安と心細さもあった。あ那时的の自分に出会ったら、抱きしめてあげたいくらいだ。そんな風にやってきたこの国だったが、今は、小さなスーツケース1つで身軽に出かける自分がある。少しずついろんなものが変化して、「これからはきっと大丈夫だ」と思う自分がある。

そんなことを考えながら、運河沿いをてくてくと歩く。トラムの駅で言うと2つ分、20分弱の道のりは、あっという間だった。しかし、乗車予定のバス停がある大通りの、地図上でバス停の表示がされている付近はちょうど工事がされている。普段はバス停があるであろう場所に臨時的自転車レーンがつくられ、バス停の表示はない。バスが来る方向に少し歩くと、やはりバス停はない。バスの定刻まで6分あるが、オランダのバスは定刻より早く来ることもある。早く来たからと言って定刻までバス停で停まっていてくれるわけではないので、一刻も早くバス停を見つけたい。乗車予定のバスのバス停までの経路が地図上で正確に示されているものの、それ以降は目的地である駅まで直線で結ばれ、大きな交差点を通りすぎた後にバスが直進するのか右折するのか分からない。街の中心部を通るなら、直進していただくか。そう思いながら、通りを渡り、バス停を探すも見当たらない。一人の男性が横断歩道を渡ってきたので、バスに乗りたいが、バス停はどこか知らないかと尋ねるも、この時間はバスに乗れないんじゃないかと言う。そんなやりとりをしている中、男性の後ろの通りを、交差点を右折し通り過ぎていくバスが見えた。よく見ると、道の脇に停まっている車の間にNという表示チラリと見える。「行ってしまった...」そう思いながら、男性にお礼を言い、

すでにバスが通り過ぎた乗車位置に近づく。電柱の低い位置に、申し訳程度にN13と書かれた簡易な看板がくくりつけてある。どうやらNというのはナイトバスを示す表示のようだ。バスの定刻まではまだ4分あった。人は心や体の状態で視野の広さが変わると言うがどうやら本当らしい。どうにか家を出てきはしたが、頭はボーッとしている。道の脇にある小さな看板を見つけられるほどの注意力はないということだ。移動中にこれまでの日記の編集をしようと思っていたが、注意力が低いのであれば、編集はもう少し思考がハッキリしてからやるのがいいかもしれない。なんてことが頭をよぎる。

バスが駅に着く時刻から電車が来るまでには40分以上時間がある。ここから駅まで歩くと30分くらいかかる。歩けなくはないが、できれば歩きたくない。そう思いながら、昨日の昼間に交通機関を調べたときには運行中の車両が全く表示されていなかったUberを開いてみると、数分後に到着できる車があることが分かる。利用が混み合っているということで料金は割高だが、多少落ち着かないエリアを歩いて通り抜けるよりはいいだろう。と、車道の脇であれこれ考えていると、通り過ぎた1台の車が停車をし、バックをして戻ってきた。誰かを待っているのか、どこへ行くのか、と運転している男性が聞いてくる。Den Haag HSに行くつもりだが、今タクシーを呼んだところだと言いながら、Uberの配車ボタンを押す。オランダの人は基本的に親切だ。困っている人に、気軽に手を貸してくれる。それは分かっているが、さすがに夜中の（昼間でも）知らない人の車に乗るわけにはいかない。純粋な親切心であれば邪険にするのは申し訳ないと思いつつ、タクシーがすぐ来ることを伝える。

ほどなくして到着したタクシーに乗ると、どっと眠気がやってきた。私は起きてすぐには活動ができるが、少し時間が経ってから一気に血圧が下がってくるという体質だ。今はいきなりエンジンをかける必要がなく、ゆるやかに活動を始めることができるので、急激に上がった血圧が急激に下がるということもないが、今日は久しぶりに寝起きの身体と意識を叩き起こして活動をしていたのだろう。低い思考力で精一杯あれこれ考えるのに、無意識のうちにかかなりのエネルギーを使っていたようだ。タクシーは道なりに進み、駅の前に到着した。荷物を出すのを手伝う必要があるかと聞かれるが大丈夫だと答え、お礼を言ってタクシーを降りる。駅の入り口に据え付けられた電光掲示板には、乗車予定の電車と、その次に来る電車の案内がポツンと表示されていた。2019.9.1 Sun 4:39 Den Haag

328. セキュリティチェックもゆったりと

空港は、いつもどおりすでに多くの人がいた。駅を出てすぐのところの搭乗口案内で搭乗予定の飛行機を探すも6:55と表示されたいくつかの案内の中にジュネーブ行きは見当たらない。と、それは到着予定の飛行機を示す掲示板で、その裏側が出発予定の表示だと分かる。確かに向こう側の表示を見上げている人の方が多い。移動し、改めて見上げると、6:55発のジュネーブ行きは1Aというターミナルが表示されている。KLMがメインで使用する空港中央部のターミナルではなく、ルフトハンザなど他国の航空会社が主に利用する、少し外側にあるターミナルだ。ターミナルまで歩く分、セキュリティチェックは混み合っていないことが多い。昨日、9月1日は空港のセキュリティチェックのメンバーがストライキを行う予定のため、時間に余裕を持つてくるようにという案内が届いた。33分間のストライキを何度か行う予定だと書いてある。33という数字には何か意味があるのか。

それもあって早めの電車で来ることを決めたが、セキュリティチェックはいつも通り行われていた。カバンからパソコンや透明の容器に入れた液体物を取り出し、ケースに乗せる。ボディチェックを通過すると、2つに分けた荷物のうち、スーツケースを置いた方が再チェックのレーンに流れていた。前には5,6個のケースが並んでいる。先頭の子ども連れの家族の荷物の1つ1つがチェックを受けていて、列はなかなか進まないが、特段、焦る気持ちは起こらない。搭乗時刻まではまだまだ時間がある。時間や空間にゆとりがあると、心はいたって平和でいることができる。セキュリティチェックのスタッフが、笑顔で対応しているように見えてくる。そしてそれがありがたいと感じる。きっと、自分が時間を気にして焦っていたら、嫌なことばかりが目につくのだろう。やっと私の番が来て、スーツケースを開けるが、チェックにひっかかったものがなかなか見つからないようだ。ポーチにパソコンなどのケーブルがまとめて入れてあるのでそれではないかと言ってみるも違うと言われる。もう片方の側に入れたスーパーフードなどをまとめたパックをさらにまとめたジップロックの中に、味噌の入った小瓶を見つけ、納得したのかしなかったのか分からないが、もう大丈夫だと言われ、スーツケースを閉じた。

スーツケースを引きながらポケットに入れたスマートフォンを確認すると5:22と表示されている。搭乗時刻は6:25、6:00に到着する次の電車に乗っても間に合ったかもしれない

が、1時間後はきつともっとセキュリティチェックも混み合っていたらう。たとえ間に合ったとしても気が急いた状態で飛行機に乗り込むよりはずっと良かった。ゆっくりいられるほどに気持ちは穏やかで、気持ちが穏やかだと、小さくて素敵な景色をたくさん見つけることができる。決まった時間に合わせて動かなければいけないと、ついつい気持ちが前に向かうが、今日はひとまずここまでくれば安心だ。2019.9.1 Sun 6:06 Schiphol

329. 搭乗前のエネルギー切れ

搭乗時刻が近づくとともに、おなかがすいてきた。朝から摂取したのは白湯と白湯に入れたクコの実だけだ。せめていつも朝に飲んでいる飲み物を飲んでくればよかった。お腹が空いてきたが、KLMの飛行機では、サンドイッチが出されるはずだ。

搭乗ゲート近くの椅子に座り、先ほど、投稿予約をした日記の確認をしていると、振っている番号がずれていることに気づく。数日前に番号が重複して以来そのままになっていたようだ。現在は、日記の内容をnoteにも転載しているので、そちらの番号も併せて、1つ1つ修正していく。気づけば日記に振った番号は300を超えた。自分が積み重ねてきたものを実感する機会というのは普段なかなかないため、なんだかとても嬉しい。

搭乗時刻ギリギリまで日記を書こうかと思っていたが、空腹とともに、頭が働かなくなってきた。飛行機の上からアルプスの山々は見えるだろうか。しかし、眠気も来ている。この調子だと、離陸前に眠りについて、着陸の衝撃で起きることになるかもしれない。

2019.9.1 Sun 6:22 Schiphol

330. 連なる山に囲まれた街で

ココナッツオイルを口に含んでオイルプリングをしながら太陽礼拝のポーズを繰り返した。小麦若葉とヘンプパウダー、アマニ油を水に溶かしたドリンクを飲む。いつもと変わらない朝。しかし、窓からは少しくすんだような様々な色の家、そして、先の部分に雲がかかった壁のようなものが見える。見る限りずっと、左右に山が連なっているようだ。あれはアルプスの端の方かもしれない。開けた窓からは、ひっきりなしに駅に入ってくる電車の音が飛び込んでくる。

昨日は案の定、飛行機の着陸の衝撃とともに目が覚めた。スキポールからジュネーブまで1時間10分の短いフライトの中で、機内のスタッフが忙しくサンドイッチと飲み物を配り、サンドイッチを食べ終わってまたうとうとし、目を開けると、隣の席に座った男性が手元に私のゴミも合わせて2つのゴミを持っており、近づいてきたゴミ回収のスタッフに渡した。お礼を言うと、何か言葉を返してくる。ほどなくしてまた眠気がやってきて、気づいたら、飛行機はブレーキをかけつつ滑走路を走っていた。せっかく窓側の席だったのに上空からの景色を見ずして到着してしまったことが少し悔やまれた。飛行機を降りると、滑走路の周囲を囲む山々が見える。オランダやドイツでは見ることのない景色。普段とは違う国に来たのだという感覚を味わいながらも、パスポートロールを通ることもなく機内に持ち込んでいたスーツケースを転がし、あっけなく、空港の到着ロビーに出た。到着ロビー付近は、空港には珍しく柵のようなものがない。地面に明かりの組み込まれた赤い線が引かれ、それが待合者が踏み込むことのできるゾーンを示している。一本の線で空間を区切るという感性は日本人の感性にも近いかもしれない。物理的なものではなく、一本の線という人の心理に働きかけるもので空間を区切った運用をしていることから、ジュネーブがいかに落ち着いた都市であるかが分かる。

空港からジュネーブの中央駅までは電車で10分、3スイスフラン。調べると今、スイスフランは1スイスフラン約107円なので、とてもリーズナブルに市内の中心部と空港を行き来できるという感覚だ。駅前のホテルで荷物を預け、レマン湖の周辺を散歩し、半日を過ごした。

今日はどこに行こうかと考える中で、ジュネーブにはセルン（CERN：欧州原子核研究機構）があるということを知った。なぜだか私は最近、宇宙物理学に興味がある。セルンがジュネーブにあるということを知り、来てから知るくらいなので、「にわか」ではあるが、せつかならセルンに行ってみたいと思うも、今日は見学の予約が埋まっており、空きがあるのは5日だと分かる。残念ながらそのときにはチューリッヒに移動してしまっているので今回は見学はできないが、今後ぜひともセルンには行ってみたいという気持ちが強くなる。また、ジュネーブは哲学者のジャン＝ジャック・ルソーの生まれた場所であるということも知る。政治哲学・音楽理論・言語の起源・教育学・植物学などの研究をし、他者との交流よりも自然と孤独を好んだという記述を見て、ルソーの人生や考えたことにこれもまた、にわかにはだが興味が湧いてくる。私の旅の多くは、目的はなく、強いて言えば、ゆったりと過ご

し、その街の空気を味わうことが目的だが、こうやってその街に関係がある人や物に自然に出会い、関心を持つことで自分の中の世界、見る世界がゆっくりと広がっていく。そして、いつもの暮らしに戻ったときに、これまでと違った景色が見えてくる。それが私にとっての旅の楽しみかもしれない。

今日はどこで何をしよう。計画はないが、自然に小さな冒険が立ち現れてくるだろう。

2019.9.2 Mon 11:05 Geneva

331. ジュネーブで出会った音楽と、身体に刻まれた旋律

部屋の窓から見える山々の峰がオレンジがかった光に包まれている。山に囲まれた街で生まれ育った人は、山の見えない街に行ったときにはじめて、そこに山があったことに気づくかもしれない。開け放った窓から入ってくる風は、入浴してあたたまった体をほどよく冷ましてくれる。電車の音、トラムの音、車の音、工事の音。音に囲まれることで、普段いかに静かな中で生活しているのかが分かる。こうしているとたくさんの人工的な音があるように聞こえるが、ジュネーブの街中は至って静かだ。ジュネーブの駅前をはじめ街中には、トラムやバス、車が行き交うにも関わらず信号のない場所が多くある。しかしまだ一度もクラクションの音というのを聞いていないように思う。ジュネーブの都市圏には約50万人が住んでいて、それはハーグの人口よりも多いけれど、ジュネーブの市内には観光客と、サービス業に従事する人がほとんどなのかもしれない。とにかく、人々は、焦らず、先を急がず、ゆったりと過ごしているように見える。

昨日は隣町のカルージュ（Carouge）という町に出かけた。滞在期間中使える市内の交通機関の乗り放題のチケットをホテルでもらったので、気軽に足を伸ばすことができる。ホテルの近くの乗り場からトラムに乗り、入り口付近の椅子に座ると、アコーディオンとギター、マラカスを持った3人の男性が乗り込んできて、何かを話し、おもむろに演奏を始めた。ドイツやイタリアでは道端で、ロンドンでは駅の構内で演奏をする人たちに出会うことはあったが、トラムの中での演奏に出会うのは初めてだ。目の前で楽器の音と歌を聞けるのは何だかとても得をした感じがする。と、思っていると、演奏されている曲は知っている曲だということが分かる。ジャンルも曲名も分からないが、父が好きな曲だ。動画を撮って父に送りたいと思いiPhoneを取り出すも、メモリーがいっぱいで録音ができないと画面に表示され

る。撮るよりも、自分の身体全体で感じるのがいいだろう。次に演奏された曲は、「ケセラ」という言葉が出てくるが、私が知っている「ケセラセラ」の歌とは違うようだ。なんとなくメロディーや雰囲気聞き覚えがある。どこで聞いたのだろうと記憶を辿ると、それが中高で歌っていた賛美歌だったと気づく。通っていたプロテスタントの学校では、チャペルと呼ばれる講堂で中学は毎朝、高校は週に1回、礼拝の時間があり、賛美歌を歌っていた。季節ごとに歌われる定番の歌というのがあり、中学1年生のときはパイプオルガンの演奏を追いかけるように恐る恐る歌っていたものが、3年生ともなると、楽譜を見なくても歌えるようになった。父と母は特に特定の宗教に信仰があるわけではなく、私が中学受験をすることを賛成した理由を聞くと、母は「毎朝歌を歌うのってなんだかいいなと思った」とのことだった。確かに今思えば、毎朝歌を歌うのは、どんなことがあっても心がリセットされるようで、何か清々しいものがある。そして私の体には知らないうちに賛美歌のメロディーというのが染み付いていたのだった。

2曲目の演奏が終わると、演奏していた3人のうち1人が帽子を差し出してくるので、小銭入れの中に1枚だけ入っていたスイスフランの硬貨を入れた。一昨日、ジュネーブに到着した後、散歩をしているときに足を運んだ野外のお祭りのようなもので、飲み物のコップのチャージ代として払い戻されたコインだった。滞在中、スイスフランへの換金を行わず、カードで支払いをしているので、コインは記念として持って帰ろうと思っていたが、私が家にしまいこんでおくよりも、美しい演奏のお礼として人の手に渡った方がコインも喜ぶだろう。ドイツでもよく街の中心部で楽器の演奏をしている人がいて、中にはどうやって運んできたのか、グランドピアノを弾いている人もいた。美しい演奏には感謝の気持ちを示すの当たり前のように振る舞うドイツの人々を見て、路上や街中で演奏することとそれに対してお金を払うことのイメージが変わったように思う。トラムの中で出会った生の演奏を通して、ジュネーブの街の空気はそれまでよりもずっと、体に刻まれるものとなった。2019.9.3 Tue 7:48 Geneva

332. 声と身体

朝から続いていた打ち合わせとセッションを終え、少しの作業をし、一息ついている。窓の外に見える山の峰にはところどころ雲がかかり。その手前に連なる家々の屋根の中にキラキ

ラと光っているものが見える。通気口の吹き出し口に備え付けられた金属の風車のようなものが太陽の光を反射しているようだ。ホテルに隣接する駅のホームからは、朝よりも頻繁に電車の到着や出発を知らせるアナウンスが聞こえてくる。感覚に意識を向けたせいか、ぐるぐるとおなかが鳴り出した。これは、思考のための栄養を必要としている音かもしれないが、おなかいっぱい食べることを必要としている音ではないだろう。

打ち合わせの前に、50音の発声を始めると、いつもよりもだいぶ身体の中の声の通りが悪くなっていることに気づいた。細かい粒子を気持ち良く通り抜ける音ではなく、鈍くて粘性のある粒子にぶつかりながら出てくる音だ。1つ1つ、身体を通る音を確認、音を表す動きをしながら声と身体を整えていく。ボイスワークを始めてから、旅先での心身の調整もだいぶ楽になってきた。「自分を整える型」のようなものを身につけた感じだ。瞑想や呼吸法も自分自身を整えることに有効だし、内的なことだけでも多くの気づきはあるが、声という、自分の内側を反映するものを実際に発することによって、自分自身の状態がよく分かるし、声を整えることによって自分の内側も整っていく。声の質、そして話し方などから、その人の人間関係や思考、ひいては食生活までもが分かるような気がしている。そして、自分から相手に対して伝わることも、声の質によって大きく違おうだろう。上手い・下手のようなものではなく、心と身体と繋がった声を出しているか。普段、言葉にするまでもなく大事だと思っていることを今こうしてあえて言葉にしているのは、この2日間、ボイスワークをしなかったことによって、声の具合が随分と変わっていたという反省があるからだ。それは、もちろん食生活などとも関連しているが、とにかく、自分自身の内側の状態を示す多くの情報が声には含まれているのだと思う。これは今後取り組みとして世界に届けていきたいものの1つだ。

外とのやりとりをする仕事はひと段落だが、今日のうちに取り組んでおきたいことはまだまだ残っている。一方で、明日にはジュネーブを離れることもあり、せっかくだらった市内の交通に乗れるカードを使って、もしくは歩いて、散策をしたいという気持ちもある。せっかくなら、すっきりとした心で出かけるのがいいだろう。やることに集中して取り組んで、部屋の清掃の受付期限である14時までに部屋を出たい。まずは、持ってきた味噌と出汁とクロレラで味噌汁をつくり、1つ1つのことに向き合っていく。2019.9.3 Tue 11:49 Geneva

333. 今日という旅の行き先

今日、ホテルでやろうと思っていたことを全て終えた。部屋の清掃の受付時間は過ぎてしまったが、部屋の掃除は自分ですればいい。1つ1つのことを納得いく形で終えていくことの方が今の私にとって重要だ。

窓から見える壁のような山の峰にかかる雲はすっかり姿を消した。目に入る家々が、「イタリアっぽさもあり、フランスっぽさもある」と感じている私は、まだ「スイスもしくはジュネーブらしさ」というのがどこにあるのかを見つけられていないのだろう。新しい場所を訪れると、それをすぐに知っている場所にあてはめてしまいたくなるが、何かとの比較ではない実体験としてのその街との出会いをもっと味わっていきたい。それは人との対話とも同じだ。まっさらな心で人や場所に向き合ったとき、そこに立ち上がっているのは唯一の景色であり、聞こえてくるのはその人の人生を含んだ言葉なのだということが分かる。

今必要なものは確認し、手放した。さて今日はこのあと何をしようかとGoogle Mapでジュネーブの地図を開く。すると、強い意識と無意識が一緒になって、検索窓に「CERN」という文字を打ち込んだ。どうやら私はやはり、欧州原子核機構が気になっているようだ。見学ツアーには参加できなくても、建物だけでも見てみたい。そんな私の心を掻き立てるものは何なのだろう。幸いにもCERNまでは、ホテルの近くからトラムに乗り、30分足らずで行くことができる。日本語でCERNについて検索をすると、CERNで行われている実験の影響について様々な説が唱えられていることを見つけることができる。それらはどれも興味深いけれど、知識としてそれらを知ったところで何になるだろうかという気がしてくる。私が知りたいのは、「自分自身がそこで何を感じたのか」ということだ。トラムに揺られる時間は、考えや感覚を整理するのにもちょうどいい。ホテルに隣接するジュネーブ駅から聞こえてくる、アナウンスが、新しい旅への案内にも聞こえる。心のままに、今日も見て、聴いて、感じて揺れていよう。2019.9.3 Tue 15:07 Geneva

334. 人と人のあいだをつなぐもの –世界を変えた場所を訪れて–

2019年9月3日、私はスイスのジュネーブの郊外のメラン (Meyrin) という街からジュネーブ

中心部に向かうトラムの中にいた。訪れていたのはCERN、欧州原子核機構。大型ハドロン衝突加速器（LHC）を使って陽子を超高速に加速し衝突させ、高エネルギーの素粒子反応を起こそうとする実験を行なっている世界最大規模の素粒子物理学の研究所だ。真偽のほどは分からないが、この実験によってミニブラックバンやブラックホールが作り出されている危険性があり、それが宇宙全体を破壊してしまう恐れもあるとも言われている。世界中の科学者たちが集まると言われるこの場所は、人類、そして宇宙の歴史を大きく変える場所になるかもしれない。

ちょうど30年前、この場所で生まれ、既に人類の歴史を大きく変えたものがある。www（World Wide Web）、現在一般的に「インターネット」と呼ばれている世界だ。1989年、CERNに在籍していたティム・バーナーズ＝リーがwwwのコンセプトを発明。1993年、CERNはwwwをすべての人に無償で利用可能にすることを発表した。その後の世界のめまぐるしい変化は説明するまでもない。ジャレド・ダイヤモンドは著書『昨日までの世界』で、国家が成立し文字が出現する以前の世界と現代世界の対比を描いたが、www以降の世界が当たり前となった私たちにとって、1993年以前はまさに「昨日までの世界」だ。

ティムが当初想像していたのはオープンソースを活用した中央集権型ではない世界だった。それは現在ブロックチェーンが目指している方向性でもある。しかし、wwwの普及によって起こったのは、ティムが描いた世界とはかけ離れた現実だった。Googleやfacebookなどの企業が個人情報を読み上げ、それに対して私たちは自分たちのあらゆる活動に関するデータの制御を自分では行うことができなくなっている。さらに「広告収入型」というビジネスモデルが掛け合わされ、wwwの世界（インターネット）の利用者は、データを蓄積している企業および、そこに広告を出す企業によって、尽きることのない消費活動を促される対象となっている。

技術はときにそれを作った人の想いや思想とは違った方向に活用される。技術を活用した人にも、それぞれの想いや思想、正義がある。「何が正しかったのか」が分かるときは来ないのかもしれない。しかし、今、私たちはその技術が使われた世の中が向かう方向性を専門家だけの手に委ねるのではなく、自らの、そして人類にとってより良い世界とは何かを考え、選択をしていくときが来ているのではないか。

CERNで行われている実験を通して、人類や宇宙の起源、そして未来を知ることができるかもしれない。しかし、それでもまだ、分からないことはあるのではないか。例えばなぜ今私が嬉しい気持ちなのか、悲しい気持ちなのか、あの人とは上手くいくのに、あの人とは上手くいかないのか。人間や宇宙を組成するものを紐解くことによって解明されることもあるが、それは一部であって全てではないだろう。なぜなら私たちは、コピーも再現も保存もできない、今という動的な瞬間を生き続けているのだから。

「今私たちが抱えている“コミュニケーションの課題のようなもの”は、急激に起こった世界の情報化によって生まれたものだ」ということを考えているときに滞在しているのが、奇しくも、情報化のはじまりとなった、wwwの生まれた場所だった。これは偶然ではないのかもしれない。私たちが今乗り越えるべき課題のヒントがここにあるのだろう。

効率や生み出すものの高性能化を目指して働くことを求められた時代から、これまでとは違った基準で幸せを生み出すことを求められる時代へ。その中で、私たちが「交わすべきもの」もアップデートをすることが迫られている。

人間をどんなに細かく分解しても分からないことがある。それが、人と人との「あいだ」にあるものだ。世界の変化とともに、「コミュニケーション」や「関係性」についての定義や認識自体のアップデートが必要となっている。言語情報・視覚情報・聴覚情報が存在することを前提とする、メラビアンの法則では語れないものが飛び交っている世界で、私たちは、人から何を受け取り、何を伝えていけばいいのか。計測できることを極限まで追い求める人たちがいるこのジュネーブの地で、計測できないことに取り組み続けることの意義を強く感じている。2019.9.3 Tue 19:44 Geneva

335. 夕焼けの見える街で考える時計を作る人々のこと

スーパーでお水を買って帰ってくると、ガラス貼りのエレベーターから見える山々はシルエットとなり、山ぎわが赤く染まっていた。この1年間、オランダでは見ることのなかった景色。これを味わわずしてスイスを味わったと言えただろうか。出かけるときは夕方に一度訪れたスーパーにもう一度足を運ぶのを面倒にも感じたが、ずっと部屋の中にいたら気づか

なかった景色に出会うことができた。

線路の向こう側には猫と蛇のネオンが灯る不思議な建物がある。セルンに向かうときに線路の向こう側に向かうトラムに乗って気づいたが、線路のこちら側とあちら側は大きく違う世界だ。こちら側は、駅から湖のほとりまでホテルが立ち並ぶ。あちら側は住宅地のようだ。おそらく物価もかなり違うだろう。セルンまで向かう間「何がスイスらしさなのか」と考えていた。スイスと一言に行っても様々な歴史的背景を持った街がある。特にジュネーブはスイスの中でも南部に位置し、フランスの中に入り込んだような形になっている。話されている言葉はフランス語だ。道路を走る車の中にはフランスナンバーのものも混ざっている。街を抜けると、もう、どこに国なのかを何で判別したらいいのか全く分からない。

昨日、街中を散歩しているときに、人間を「時間」という概念と労働に縛りつけることを後押しした「時計」を作ることを主な産業の1つとしながら、永世中立という立場を取り、軍事・外交的な安定感とその守秘義務の高さから多くの資産が集まる場所になっているという、スイスの巧妙さのようなものを感じた。そういう立場を取ることが、国や民族を守ることだったのかもしれない。どんなに技術革新やパラダイムシフトが起こっても、1日が24時間で、時計の文字盤に刻まれる数字が1から12であることは変わらないだろう。オランダの人が時計や時間を全く違う概念のものに作り変える可能性は想像しうるが、スイスの時計職人が、時計や時間の考え方自体を変えることはないはずだ。それが、スイスで感じる安定感のようなものの土台であり、スイスの限界なのかもしれない。スイス、と一口に言っても、私が見ているのはその一地域の中の一部に過ぎない。

水だと思って買ったものがスパークリングウォーターだったことが、ボトルの蓋をひねってはじめて分かった。まだまだ私が見ているスイスは「ペットボトルの外側から見ている透明な液体」に過ぎないだろう。明日からは、ドイツに近いチューリッヒで過ごす。いくつかの表情を知って見えてくるものが、きっとあるだろう。2019.9.3 Tue 21:21 Geneva

336. 遅延した電車のもたらした出会い

川の向こうに立ちのぼる山々の上方、3分の1くらいには雪が積もっている。大きなパラソルが遮らなければ目を細めたくなるくらい日差しは眩しい。こんなに暑いのに、見える山に

は雪が積もっているのが不思議に思える。水着を着た女の子たちが川沿いを歩いてきたかと思ったら、次々と川に入っていった。賑やかな声が水の流れに乗って遠ざかっていく。

今朝は6時半に起き、8時前にホテルを出た。GenevaからLausanne、Montreux、Vispを經由して、Thunという街に向かう。最終目的地はチューリッヒだが、ジュネーブからチューリッヒまでの経路を検討した結果、せっかくなので、スイスの山の間を通るルートを選んだ。乗る電車が来る予定のホームにはとうに出発予定時刻を過ぎた乗車予定の電車の一つ前の電車が停まっている。電車の中に人がいるので乗り込んでみたが、数分も経たないうちにこの電車はキャンセルになったというアナウンスが流れ、再びホームに戻ることになった。次の電車が予定通りに来るのか、どのホームに来るのか分からない。そんな不安が顔に出ていたのか、若い男性が日本語で「状況がわかりますか？」と話しかけてきた。続けて、人身事故が起きたため、電車がキャンセルになったという今の状況を教えてくれる。話すスピードはゆっくりだが、日本語はとても丁寧だ。聞くと、日本の大学に交換留学で行っていたことがあり、この9月からローザンヌの大学で観光について学び始めたところだと言う。ジュネーブで生まれ育ったという彼は、私の知る、ドイツの人ともオランダの人ともフランスの人とも違う。そうか、これがスイスの人なのか、と、やっとスイスが近づいて気がする。自分が言葉を勉強し、訪れたことがある国の人を地元で見かけたときに話しかけたくなる気持ちというのはすごくよく分かる。相手が困っていそうであればなおさらだ。彼はきちんと脚を揃えた姿勢で、スイスの電車が遅れるのは珍しいこと、スイスの人も日本人と同じように時間に性格で手先が器用なこと、スイスの物価は高いけれど、暮らしているとそれが当たり前なので気にならず、他国のどこに行っても（東京でさえも）物価が安く感じるということ話をしてくれた。2019.9.4 Wed 13:49 Thun

337. 街と名前を辿って

電車への移動を終え、ホテルに着いた。ここはチューリッヒ。スイス北部のドイツにほど近い街であり、銀行・金融の世界的な中心地だ。という、Wikipediaで見た情報しか、まだこの街のことは分からない。チューリッヒの中央駅から15分ほど歩いたのだろうか。行けども行けどもくねくねと道が伸びる。ドイツでは街の中心部に広場があることが多い。街の中心というか重心に当たる場所が何もない広場であり、それは、季節ごとのお祭りなど、色々なも

のを受け止めることのできる余白でもある。ドイツに近いチューリッヒにもそんな場所があることを想像して街を歩いていたが、ホテルに着くまでに広場のような場所があるかどうか、そして街の全容も分からなかった。ジュネーブで話されていたのはフランス語だったが、ここではドイツ語が話されているはずだ。スイスの山間部を抜ける電車の中で、気づけばアナウンスはドイツ語が中心になっていた気がするが、やはりまだ言語についての実感や実体験もない。

今朝は8時40分を過ぎた頃、予定よりも30分後ろ倒しになったが、ローザンヌで観光について学んでいるという日本語が話せる男性の案内のおかげで、ジュネーブ駅から無事電車に乗ることができた。LausanneとMontreuxというレマン湖畔にある街を通り、山々に囲まれた街を通り抜け、Vispという街で乗り換えをし、Thunという駅についた。Thunはその周辺の中では比較的大きな街という情報だったが、行ってみるとアルプスから流れる川の水音が気持ちのいい、可愛らしい街だった。打ち合わせができる静かな場所を探して中心部を歩き回る。いくつか候補を見つけたが、最終的に落ち着いたのは、遠くに白い雪を抱える山の見える、川辺のカフェだった。

Thunからはまた電車に乗り、Bernを通り（折り返しをし）、チューリッヒに着いた。地図をみると、Bernの南側にはKünizという街がある。ウムラウトを含む文字が使われていることから、ドイツ語に由来する名前であることが予想される。さらに南東に見ていくとSchmittenという名前の街がある。これもいかにもドイツ語っぽい。そのさらに南東にあるFribourgという街は、フリブールという読み仮名が振られている。この名前はおそらくフランス語に由来するだろう。ドイツ語では、「丘」を表すburg（ブルグ）がよく地名に使われているが、フランス語圏になるとそれがbourg（ブール）になる。こうして見ていくと、フランス語・ドイツ語・イタリア語・ロマンシュ語の4つの言葉を今日用語とするスイスの、それぞれの街の歴史歴な変遷のようなものが見えてくるようで面白い。今朝、スイスのことを教えてくれたスイス人の話だと、スイスの中で違う地方に住み違う言葉話す人同士が会話をするときには結局英語で話すことになるということだった。「スイス」という一言の中に、国としての奥深さが凝縮されている。

明日は朝の打ち合わせ以降、特段予定はない。今日の打ち合わせを通じて早速進めたいこと

が出てきているが、それも、チューリッヒの空気を大いに感じながら取り組むのがいいだろう。今いる場所からはお堀のような、運河のような場所、そしてチューリッヒ湖にも歩いて出ることができるようなので、散歩をし、内側から浮かんでくる言葉をすくい上げていきたい。2019.9.4 Tue 21:28 Zürich

338. チューリッヒの朝

打ち合わせを終え、薄いブラインドを上げ、部屋の電気を消した。20mから30mほど離れた隣の建物の屋根の上に、雲の浮かぶ空が見える。部屋が静かなのは締め切られた二重窓になっているからだということに気づく。昨日まで滞在していたジュネーブのホテルは、窓を開けることができたが、窓を開けると隣にあるジュネーブ駅のアナウンスや電車の音、車の音などがひっきりなしに入ってきた。（窓を閉めていても音が気になるくらいだった。）今は、目を閉じて耳を澄ましても、外からの音は聞こえて来ず、建物内の微かな生活音のような音だけが聞こえてくる。静かなのはありがたいが、締め切った部屋にこもっていると、自分が鳥かごの中の鳥になったような気分になってくる。ほどよい静けさと人の気配、そして1日の中での時間の移り変わりや季節の移り変わりが分かるオランダの今の家は本当にいい環境なのだということを実感する。

昨日は電車の移動が長かったためか、腰から背中にかけて、凝りのような、気の滞りのようなものを感じる。昨日の打ち合わせの中で、ボルダリングの話題が出てきたが、滞在先や出張先でボルダリングジムに行くというのは、身体の状態を整える良い方法にもなりそうだ。調べてみると、チューリッヒにもボルダリングジムがある。今回はぴったりとしたズボンしか持ってきていないけれど、今後、旅に出る際には、動きやすい服を持ってきて、そこにあるボルダリングジムに行くというのも良さそうだ。散歩をして街を味わうことはもちろんだが、ある1つのテーマに沿った場所に様々な国や地域で足を運ぶことによって、その国や地域の特性というのも見えてきそうだ。

朝から常温の飲み物しか口にしていないためか、部屋に日が差さないためか、体が冷えてきた。持ってきた味噌と出汁と味噌汁の具とクロレラで味噌汁を作りたいところだが、残念ながらこの部屋には電気ポットがない。

お湯を使いたいときはフロントに言えば持ってきてくれるということだったが、電話をしてみると、フロントまで取りに来てくれということだったので、マグカップに注がれたお湯をもらってきた。早速味噌汁を作ろうと味噌の入った小さな瓶を開けようとするもなかなか開かない。一昨日、味噌汁を作ったときはすんなりと開いた蓋が、今は頑なに動かない。発酵が進む間に中の空気が減り蓋が開きにくくなるということがあるのだろうか。そんなことを考えながらどうにかこうにか瓶の蓋を開けた。熱々のお湯をもらったのでごくごく飲み干すことができないが、身体に味噌汁の成分を染み渡らせるにはゆっくり飲むのがちょうどいい。今朝、打ち合わせを始める前に部屋をある程度片付けたので、今日このあとは一昨日の日記を編集しアップすること、YouTubeチャンネルの開設方法について調べること、今日の散歩場所を確認することを行いたい。せつかくならYouTube用の音声をどこかで撮影できればと思っている。2019.9.5 Thu 9:56 Zürich

339. そこにいる人に出会わない街

部屋でウェブサイトの更新を行っていると、窓の外がどんどんと暗くなっていった。念のために天気予報を確認すると約90分後に雨が振り始める予報になっている。今日はもう散歩には向かないかもしれない。しかしせつかくのチューリッヒ滞在、ホテルにこもっているだけではチューリッヒのことを何も感じずに終わってしまうかもしれない。そう思って、小さなノートとペンだけを持って部屋を出た。途中でどこか気持ちの良さそうなカフェがあったら、開始するYouTubeチャンネルの内容について考えを巡らせたい。

近くには伝統的なオランダの街に見られるような星型のお堀のような運河のようなものがある。そこまで出て行き、運河沿いを進み、チューリッヒ湖まで出ようと歩く。途中、運河沿いの建物のいくつかにPrivate Bankという文字がついているのを見た。プライベートバンクというと何か世の中から身を隠したようなイメージだったが、特別なものという空気を醸し出さず、ただ、ふと、そこにあった。金融や銀行の街と呼ばれるだけあって、街中にはカッチリとしたスーツを着ている人も多い。ヨーロッパの中でこんなにスーツを着ている人の多い街を訪れたのは、ドイツのフランクフルト以来かもしれない。特斯拉やポルシェ、フェラーリ、マセラッティ、ベントレーなどの高級車はフランクフルトよりも圧倒的に多い。(ベンツやBMW、アウディなどはこちらでは一般的な車だ。) ほどなくしてチューリッヒ湖に着

いたが、ジュネーブでリヨン湖を見たときのような爽やかさというか気持ち良さのようなものは残念ながら感じない。どんよりと雲が広がる空の下というためもあるだろうし、遠くに見える山がスイスでこれまで見えた岩の壁のような雄大さを感じさせるものではなく、緑の茂った丘のような山なためもあるだろうし、交通量の多い大通りが近くにあるというためもあるだろう。

湖のほとりを少しだけ歩き、街の中心部らしき方角に歩く。だんだんと車の音も少なくなり、おそらくスイスの伝統的な建物が並ぶエリアに入った。石畳の道に、時折、細い小道が現れる。物語の世界を散歩するような感覚は楽しい。しかしどこかのお店に入ろうという気は起こらない。なぜだろうと考えながら歩き続ける。街並みは美しい。ショーウィンドウも美しい。店の中には身なりの整った人がいる。しかし、いくら歩いてもチューリッヒやチューリッヒの人に出会う感じがしない。ほどなくして細い道を抜け、大きな店が立ち並ぶエリアに出た。その一角、おそらく一等地と呼ばれる場所の1つにショーウィンドウに厳かにマネキンが飾られている。その上にはZARAという文字が掲げてある。ファストファッションと呼ばれるジャンルの服が、日本の価格のおそらく倍以上はする。それを見て気づいた。これまで歩いてきたエリアにあったのも、「どこかで見たことのある店」ばかりなのだ。日本でもそれ以外の国でもデパートに行くところも同じようなブランドの店が並んでいるが、そんな感じで街中の店は高級なものもそうでないものも含めてナショナルチェーンの店ばかりなのだ。「チューリッヒの街と人に出会う感じがしない」という感覚の理由がそこからきているだろう。

オランダでも大きな街の中心部にはナショナルチェーンの店が並んでいる通りもあるが、それはほんの一部で、「地元の人がやっている何屋さんかよく分からない店」も多い。カフェと雑貨屋が一緒になっていたり、ヴィンテージショップと花屋が一緒になっていたり。共通するのは「店主が好きなものを置いている店」という感じがすることだ。そこには自然と滲み出る個人的な好みがあり、人間らしさがある。そんな店に入っていくだけで「誰かに出会う」感じがするし、店の人は、飾ることない自分自身でそこにいて、家にやってきた友達を迎えるように「こんにちは」と話しかけてくる。

ここではどこで働いても高いお給料がもらえるかもしれない。しかし、もしそこに自分自身の楽しみが重なっていないのであれば、それを満たす活動を他にすることが出てくるだろう。

う。お金があれば叶うこともあるかもしれない。一方で時間は誰にも等しく平等で限られている。

ホテルまでの帰り道の途中、向かいの道をスケートボードに乗って進む人がいた。キックボードに乗っている人も多いのでその姿自体は珍しくない。しかし、くたびれたスーツを着て、大きなカバンを抱え、背中を丸めてひたすらにスケートボードを漕ぐ姿はどこか物悲しく見えた。それはチューリッヒに生きる人の姿であると同時に私が持ったチューリッヒの街に生きる人の印象だった。きっとすでに視界の外側に追いやられているものもあるだろう。

「金融資本主義の中で人々が自分の顔を失った街」という印象を持ったこの場所で、新しい景色を見つけ続けていきたい。2019.9.5 Wed 14:07 Zürich

340. チューリッヒで見た奇妙な夢たち

寝すぎ防止のためにかけている目覚ましが鳴る前、長いこと夢を見ていた。いくつかの奇妙なシーンを断片的に覚えている。学校の売店のような場所で味噌汁を買おうとしたところ、130円と言われ、手持ちの現金がない私は、翌日かその次の日にでも支払いをしていいかと聞いた。店主の男性は快く了承してくれ、さらに袋に入った細いフランスパンのようなものもおまけしてくれた。店を離れ、パンを袋から出してみると、細長いパンの端から長い髪の毛のようなものが出ていた。パンを袋から出すと、1本や2本ではなく、束になるほど髪の毛がたくさん出ていることが分かる。せっかくもらったけれど、さすがにこれは食べられないし、もし恒常的にこんなことが起こっているのならまずいだろうと思い、パンを店に返しに行くことにする。店にいくと店主の近くにもう一人、髪が長く、ウェーブがかかった毛をたらし仕事をしている男性がいたため「きっとあの人の髪だろう」と考えた。店主にパンを返すと何かしら詫びの言葉があった。その場を離れると一人の女性がやってきて、何かを手渡してきた。そのときに私はその人が店のスタッフの一人であること、自分が味噌汁の代金を払わなくて良くなったことを理解した。

それからいくつかの場面を経て、金髪の女の子が出てきた。顔立ちは日本人のようで、手足がひょろっとして日焼けをしている。6歳か7歳くらいだろうと想像していた。知り合いの子どもであるその子は夏休みの間その街（私が住む街）に滞在していたようだ。「8月に

一番楽しかったことは何？」と聞くと、「現実の世界も夢の中も楽しかった！」と彼女が答え、夢の中の話を始めた。私は彼女が夢を夢だとハッキリと認識していることを不思議に思い「何から夢の中だと分かったの？」と質問したが、それに対する明確な答えはなかった。

そこから少し場面が変わり、私は飲食店のような場所で働いていた。そうすると、他店のスタッフか、オーナーの関係者のような女性が現れ、「みんなに」と、小学校のときの給食のパンが入っていたような、平たいカゴのようなものを差し出した。見ると中に様々な種類の食べ物のようなものが入っている。私は「年末だから差し入れをしてくれたのかな」と思い、他のスタッフの後に続いてその中身をもらいに行った。中にはあんみつや小豆の入ったお菓子があり、もらうならそれがいいなと思って眺めているも、他のスタッフがそれらを取ってしまい、最後に残ったのは、ブリキのじょうろのようなものが2つと、ブリキのバケツが2つと、お好み焼きのように平たく形を整えられた白米のかたまりだった。もう一人、私以外にもその中からもらうものを選ぼうとしていた人がいたが、二人で顔を見合わせ、結局何ももらわないことにした。2019.9.6 Fri 8:16 Zürich